にこやかな笑顔を思い出しながら

神戸市立桜の宮小学校　竹内　隆

澤田さんと私の出会いは昭和六十二年の秋、大学院の受験の日のこと。かねてから「現役の高校の先生が内地留学で来られる」という話を聞いていた私は、休憩時間も終始硬い表情でおられた澤田さんを見ながら「これがその方か」と思いつつ、国語教育・国文学を合わせて五名の定員枠に自分が入ることなど、とても現実とは思えないまま過ごしていました。思いがけず合格を果たし、翌年四月から大学院生活が始まりましたが、同期の中森君がムードメーカーとなり、澤田さんも肩の荷を下ろされたのか、その後は終始にこやかな笑顔を絶やすことはありませんでした。国文法の授業のため、文学部に向かう途中の六甲台で秋に銀杏拾いに興じたこと、研究会で金沢に行った時、てんぷら屋や鰯料理店で楽しい時間を過ごしたこと、新年には澤田家に同期全員が集まり、賑やかな会を持ったこと（社会的には前日に昭和時代が終わり、自粛の嵐が吹いていたのですが）…。数々の思い出の中で最も印象深いのは、修了直前に国語教育講座の有志で鳥取旅行に行った時、一人がおみやげの「あごちくわ」をどこかに置き忘れてきたことを言うと、さっと自分の分を差し出されたことです。そのスマートな姿に澤田さんの優しさの真髄を見た思いがしました。

修了後、白川小学校の教師となった私に澤田さんから二つのプレゼントがありました。一つは言葉で、「白川の流れはいつか大海へ」。もう一つはクジラの図柄のネクタイ。その心は「子供達にあまり目くじらをたてないように」。あれから約四半世紀。今なお小学校の現場で日々格闘している私には耳に痛い、戒めの言葉になっています。

澤田さんが角川短歌賞を受賞された時、有志でお祝いの会を企画しました。その時、ただ集まるだけではもったいないので、有馬温泉で吟行を行いました。その時、第一席に選ばれたのはやはり澤田さんでした。

澤田さんが兵庫区の文化センターで和歌の講座を持たれた時、一度、参加しました。最後の講座で歌合わせが行われた際、急に出席できなくなり、迷惑をかけたまま終了し、今でも申し訳なく思います。

後に歴史探訪の仕事が始まり、当時神戸市の文化財保護審議会長だった義父の方との仲立ちをして頂き、約十年間学ぶことができました。

思い返せば私の人生の彩りは数多く澤田さんに支えられているのだと思います。改めて出会いや縁の不思議さ、大切さに感じ入っています。